



学園花の村機関紙第69号

TEL・Fax

(042) 636-8291

〒

2012年10月3日(水)
編集兼発行人 伊藤公博

mitoh@alto.ocn.ne.jp

木・植林・林学

木と自然



伊藤さんの同級生との勉強会「三水会」の8月例会で「ドイツ林業の話がある。花の村の事についても話が聞けるから来ませんか？」との誘いを受け、8月22日東京の学士会館での会合にお邪魔した。昨年暮れ、村上光照老師にお目にかかったときに知り合った宮下智恵子さんに彼女の訳書「木とつきあう智恵」を戴き、古来の木とのつきあい方や月との関係について、新しい見方を教えて頂き、さらに倉真の「時の寿のもり」の植樹祭に参加した時に宮脇先生の「4千万本の木を植えた男」という著書を藤本さんに紹介され、森林の事に興味もあつたので期待していた。

講師は村尾行一氏、東大で学び、ドイツ留学で様々の経験をしてきており、事前にA4判240ページにも及ぶ資料に目を通してから勉強会

に臨む事になった。例会前に倉馬の里のメンバーと約2時間、私たちの「みんなでやろう小さい農業」の映像を見ての感想をうかがい、しばらく意見交換をした。「花の村の違和感」と題したレポートを戴いたが、映像では私たちの活動は十分に理解できていないように思われた。「雑草を敵視してはいけない」とはその通りではあるが、侮れないのも事実、雑草は刈り払ってもすぐに伸びてくる、「作物より上に出なければ大丈夫」と言われても、すぐに追いつかれる現状を見てからの話ではないかと、しばらくは村尾氏に指導を仰ぐ事にしようか。

例会においては「木材栽培業から近自然的多機能林業へ・ドイツ林業の発展・森林・林業に関して全く対蹠的な日本とドイツの体験的比較論」と題し、多くのスライドを使用して、おもしろい話を伺う事が出来た。(注)

私の哲学では「世界の4大文明は森を殺して文明を作ってきた。しかるに日本は森を守って文明を作ってきた、だから今後の世界文明は日本文明がリードしていく。」と梅原理論を自信を

持って信じていたが、240ページにも及ぶ論文で日本林業の駄目さ加減を知らされて、日本文明は森を守ったのではなくて、森を殺すほどのパワーがなかったのか、と暗澹たる気持ちになった。

ドイツではアウトバーンを作る前に森を作る、森にはオオカミや猪も共生しており、猪による畑の食害とは信じられないとは？また日本は木、西洋はコンクリートの文化と言うがドイツでは木の文化である、とか今まで私の想像以上の意外性に富んだ話であり、私たちの今後の参考になる話でした。付け加えれば、EUの通貨危機、日本の資本主義経済は終わっているとの悲観的な見方もあるのですが、村尾氏のドイツ観からは多少の希望が見えてきそうな気もする。

私たち、花の村の活動について「自然」についても一度考え直す必要があるかもしれない。豊かな自然とは取り残された自然、本来豊かであるとは利用価値があるという事、自然≠ネイチャーで私たちは考えて良いのだろうか。

光陽の里・楽農会 松井道夫

(注) 講演要旨は左記のインターネット検索で利用することができます。 B5判9頁

花の雑学三水会便り